

〈研究・調査報告〉

観光へ舵を切る国、観光から遠ざかる国 —中東の世界遺産から透視する現代世界—

佐 滝 剛 弘

【要旨】

エネルギーの供給国として、また、世界の紛争の当事者として、存在感を高める中東の世界遺産を近年訪れた経験をもとに、長い歴史を刻む豊かな文化遺産を世界の安寧につなげることができるのか、サウジアラビア、イラン、イスラエル、パレスチナなどの世界遺産への訪問と、同時に現地の政治・経済・社会事情を垣間見た経験から、「観光」が火薬庫と言われるこの地域に、そして世界にどんな影響を与えるのかを考察する。

キーワード：世界遺産、中東、イスラエル、パレスチナ、イスラム教

1. はじめに

イスラエル、パレスチナ、イエメン、イラン、アラブ首長国連邦 (UAE)、サウジアラビア……、行ったことはなくともニュースで毎日のように目にする国・地域が目白押しだ。それが常に世界の火薬庫として注目を集める、Middle East = 中東である。

過激派のテロ組織や戒律が厳しいイスラム教国などのイメージが先行し、近づきたい印象がつきまとうこの地域だが、近年急速に観光化が進行している。UAEの首都アブダビでは、2017年開館の「ルーブル・アブダビ (ルーブル美術館アブダビ分館)」を皮切りに、2025年4月にオープンした「チームラボ・フェノミナ・アブダビ」(アブダビの文化中心地であるサディヤット文化地区に、4月18日にオープン)、2026年開館予定の「グッゲンハイム・アブダビ (ニューヨークに本拠のあるグッゲンハイム美術館アブダビ分館)」など、世界的に名高いアート施設が次々と産声を上げている。

また、航空業界では、カタール航空の拠点、ドーハのハマド国際空港、エミレーツ航空の本拠となっているUAEのドバイ国際空港などがここ15年ほどで世界のハブ空港の中心的な役割を占めるようになり、多くの観光客がトランジットでこの両空港やエティハド航空の拠点アブダビ国際空港で、しばしの休息をとったりショッピングを楽しんだりする姿が日常的な光景となった。日本から欧州へ向かう場合、2025年現在、日系・欧州系のフライトはロシア上空を飛べないため、北極ルートか中央アジアルートに迂回する必要がある、所要時間が大幅に伸び

た。このため、中東経由のフライトでも欧州への相対的な距離が縮まり、ドバイやドーハに加えて、イスタンブール経由で日本と欧州を結ぶフライトの利用者が格段に増えている¹。

また、この地域は産油国が多いことでも知られ、これまではそのオイルマネーで繁栄の礎を築いてきたが、資源の枯渇の不安や国際的な脱石油化の流れを受けて、新しい産業の育成が急務となっている。その方向性の一つがアジア、欧州、アフリカからほぼ等距離にある地の利を活かした観光産業であり、前述のアブダビのアート施設開館ラッシュも同じ延長線上にある。そして、重要な観光資源の一翼を担っているのが、この地域の長く複雑な歴史を反映した「世界遺産」である。中東には、イスタンブール、トロイ（ともにトルコ）、パルミラ（シリア）、バールベック（レバノン）、ペトラ（ヨルダン）、ペルセポリス（イラン）、バビロン（イラク）、そしてエルサレム（イスラエル・パレスチナ 世界遺産としてはヨルダンの申請）と、世界史の教科書でおなじみの都市や遺跡が多く集中し、いずれも世界遺産の名誉を勝ち得ている。

筆者は2023年から2025年にかけて、イスラエル・パレスチナ、イラン、サウジアラビアの3か国1地域の世界遺産を巡る調査を行った。この時期はハマスのイスラエル攻撃とそれに伴う報復の連鎖のさなかにあり、ある意味では危険と背中合わせの調査行ではあったが、それゆえに過去の遺物としての遺産ではなく、各遺産の現代的な意味を感じ取ることができた。この訪問記を通して、重層的な歴史を物語る数々の世界遺産とそこから垣間見える現代の中東情勢の分析を加えた論考としたい²。

なお、本論で使う「中東」とは、日本の外務省が定める地域区分に含まれるアフガニスタン、アラブ首長国連邦（UAE）、イエメン、イスラエル、イラク、イラン、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、シリア、トルコ、バーレーン、ヨルダン、レバノンの15か国および日本はまだ未承認のパレスチナを加えた16の国・地域を指す。

また、表1は16の国・地域（エルサレムは後述の事情により別途カウント）の世界遺産の登録件数である。

中東全体の世界遺産は2025年9月現在117件で、全世界遺産の件数1,248件のおよそ9%にあたる。そのうち危機遺産リストに記載された物件が20件あり、全世界の危機遺産53件のうち、4割近くが中東に集中していることが分かる。これも中東が置かれた厳しい現状を如実に表していると言える。

表1 中東地域の国別・種類別の世界遺産件数

国・地域	文化遺産	自然遺産	複合遺産	総計
アフガニスタン	2 (2)	0	0	2
UAE	2	0	0	2
イエメン	4 (4)	1	0	5
イスラエル	9	0	0	9
エルサレム	1 (1)	0	0	1

イラク	5 (3)	0	1	6
イラン	27	2	0	29
オマーン	5	0	0	5
カタール	1	0	0	1
クウェート	0	0	0	0
サウジアラビア	7	1	0	8
シリア	6 (6)	0	0	6
トルコ	20	0	2	22
バーレーン	3	0	0	3
ヨルダン	6	0	1	7
レバノン	6 (1)	0	0	6
パレスチナ	5 (3)	0	0	5
合 計	109 (20)	4	4	117

ユネスコ世界遺産委員会のリストから筆者作成
 ※（括弧）内は、うち危機遺産の件数

2. 観光立国への転換～サウジアラビア～

2.1 「メッカ巡礼」の国

人口およそ3,500万人（日本のおよそ3割弱）、面積215万km²（日本のおよそ6倍）、アラビア半島の大部分を占めるサウジアラビア王国は、日本にとってなくてはならない国である。というのも日本が輸入して利用する原油のほぼ4割がサウジアラビアから来ており、これは輸入先のトップである³。もしこの石油が入ってこなければ、日本の経済はたちどころに行き詰まるだろう。いわば生殺与奪を握られた国と言っても良いこの国だが、実は日本からの訪問者はきわめて少ない。なぜならサウジアラビアは2018年までイスラム教徒以外の観光目的の入国を一切認めてこなかったからである。事実上の「開国」からまだわずか7年、しかも新型コロナウイルスによるパンデミックで、2020年から約3年間は実質的に入国が困難であったので、観光対象国への仲間入りのとば口に立ったにすぎないというほど、観光とは無縁の国だったのである。

一方、イスラム教徒にとっては、5つの戒律の一つである「一生に一度、メッカに巡礼をする」というミッションを実現するために多くの巡礼者が訪れるもっともポピュラーな旅先を抱える国であり、文字通り「聖地巡礼」を受け入れる「おもてなし」の国という側面を持つ。聖地巡礼も観光と捉えるならば（事実、観光学の世界ではそう考えられている）、すでに一千年以上、「観光」で生きてきた国とも言える。実際2024年の海外からの訪問者数は過去最高の2,970万人を記録しており、宗教的な観光が41%を占めている（サウジアラビア観光省調べ）。なお、世界観光機関が発表する「International Tourism Highlights」によると、2023年の中東の国際観光客数は、トップがトルコで5,516万人（世界第5位）、次いでUAE（2,814万人）、そしてサウジアラビア（2,742万人）となっており、これは中東と同じ文化圏で観光立国として

知られるエジプトよりも多くなっている。

サウジアラビアの観光については先行研究が乏しく、「サウジアラビアの観光政策における課題と展望」(『中東分析レポート』高尾, 2020) くらいで、非ムスリムへの観光ビザの発給がようやく始まった直後の分析であり、特に世界遺産に絞った論考はほとんどない。

さて、サウジアラビアには、2025年7月現在、表2のように7件の世界遺産がある。

表2 サウジアラビアの世界遺産一覧

	遺産名	分類	登録年
1	アル=ヒジュルの考古遺跡 (マダイン・サーレハ)	文化遺産	2008年
2	ディルイーヤのツライフ地区	文化遺産	2010年
3	メッカの玄関にあたる歴史都市ジェッダ	文化遺産	2014年
4	サウジアラビアのハイル地方の岩絵	文化遺産	2015年
5	アハサー・オアシス、進化する文化的景観	文化遺産	2018年
6	ヒマー文化圏	文化遺産	2021年
7	ウルク・バニ・マアリッド	自然遺産	2023年

筆者作成

世界的に高い知名度を誇る遺産はほとんどなく、せいぜい、まさに名称にある通り、メッカ巡礼への玄関となる「ジェッダ (現地語ではジッダ)」があるくらいである。

2.2 現王朝のルーツ、ディルイーヤ遺跡

これら7件のうち最初に訪れたのは、2010年登録のディルイーヤのツライフ地区である。

ディルイーヤは首都リヤドの郊外にあり、1744年から1818年まで、現在のサウジアラビアの前身である第一次サウード王国の都が置かれた都市である。この王国は都の名前を採って「ディルイーヤ首長国」とも呼ばれた。しかし、オスマン帝国とその意を受けたエジプト総督に攻め滅ぼされ、日干し煉瓦で造られた都市はほぼ破壊された。その後再建された王国の首都はリヤドに移されたため、ディルイーヤは廃墟のままであったが、近年、国の主導により急速に遺跡の復元が進み、中心部にあったツライフ地区が世界遺産に登録されたのである。

地区の中心にはビジターセンターが設置され、ここで入場料を払って遺跡の中へ入る。遺跡は、ワディ・ハニファと呼ばれる小川 (ワディは「涸れ川」の意味) を渡って、丘の中腹に広がる遺跡群に入っていく。宮殿、モスク、浴場、迎賓館などの建物の遺構が点在し、それぞれ中にも入ることができる。また、サウード王国の王族の系図をはじめ、遺跡にまつわる解説も充実している。公開されたエリアは遺跡全体からすればわずかに過ぎないが、現在サウジ政府はまだ整備が進んでいない遺跡の大規模な整備計画を進めており、少し離れたあたりにはクレーンが林立している。全体が完成したらどれだけの広さになるのだろうかと思わせる規模である。現在整備された部分にもレストランをはじめとした観光客向けの施設ができており、政府の気合の入れ方が伝わってくる。



写真1 発展著しい首都リヤド
(筆者撮影 2024年12月29日)



写真2 世界遺産「ディルイーヤ」
(筆者撮影 2024年12月29日)

2.3 観光に舵を切るサウジアラビア

前述のように、サウジアラビアは、イスラム教徒には古くから門戸を開いてきたが、異教徒には厳しく国境を閉ざしてきた。19世紀末に発見された大規模な油田から発掘される原油の輸出による莫大な外貨を得て国内のインフラなどを整備した。したがって特に観光客に頼る必要性がなかったこともあろうし、メッカ、メディナ（預言者ムハンマドが亡くなった都市、現地名マディーナ）以外に、シンボルとなるような観光資源が乏しかったこともあるだろう。しかも後述のようにメッカは今でも、そしてメディナも最近までは異教徒の入域は禁止されていた。しかし、石油を掘削し続ければいつか枯渇する。枯渇する前に石油以外の産業を立ち上げる必要があった。

そこで着目した産業の一つが「観光」である。幸い、観光開発をする予算は潤沢にある。また、近隣のカタール・ドーハや、UAE・ドバイには五大陸から頻繁に航空便が発着し、世界有数のハブ空港となっている。航空機が移動の中心となった今、ドーハやドバイに近接するサウジアラビアは、世界でもっとも交通の便が良い地位を知らず知らずのうちに手にしていた。ドーハ～リヤド間の時刻表上のフライト時間は1時間40分。実際の飛行時間は90分を切る。日本からも羽田～ドーハ～リヤドはトランジットを入れても17時間を切るタイムで移動できる。当然、欧州からはもっと近く、航空便の利便性を考えれば、観光地としての潜在的な発展の実力は低くないだろう。

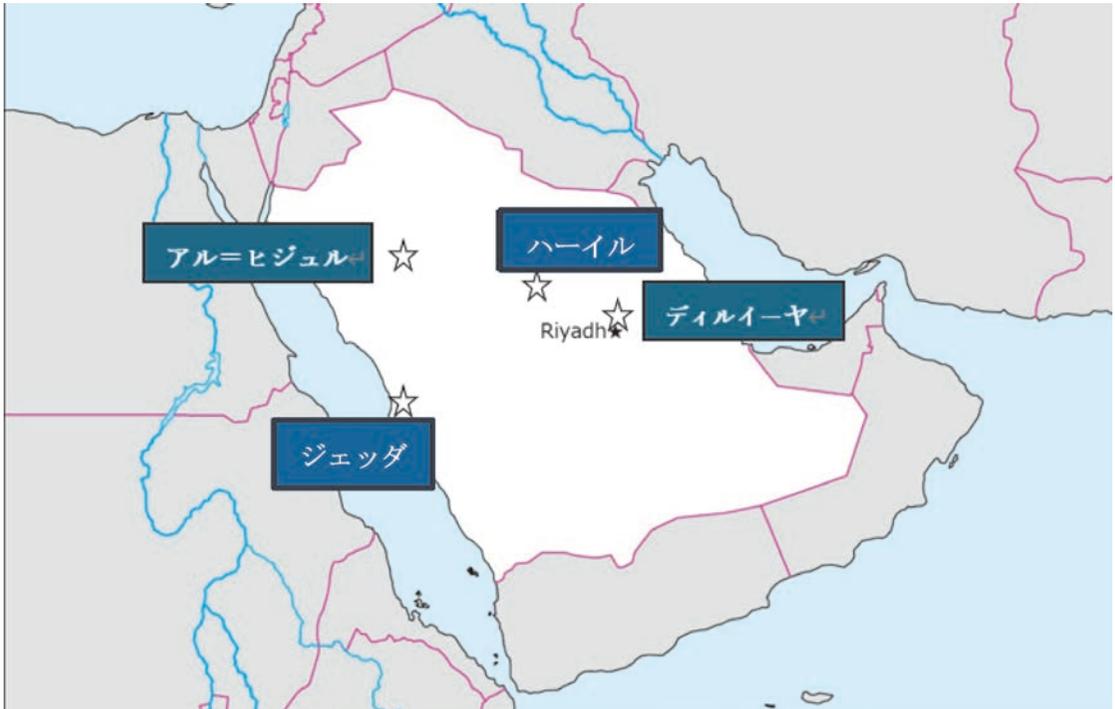


図1 訪問したサウジアラビアの世界遺産の位置（筆者作成）

2.4 サウジアラビアのハーイル地方の岩絵

サウジアラビア中部のハーイル州にある2か所の岩絵が世界遺産に登録されたのは2015年のことである。首都リヤドから州の中心都市ハーイルまではサウジアラビア航空の国内線で移動した。所要時間は1時間30分程度である。世界遺産に登録された遺跡は、ジャバル・ウム・シンマン（Jabal Umm Sinman）およびジャバル・アル=マンジュールとジャバル・ラアト（Jabal al-Manjor and Jabal Raat）であり、ハーイルに1泊したのち、バスで2時間ほどの距離にあるジュッバという町の近郊にあるジャバル・ウム・シンマンを訪れた。遺跡の入口にはチケット売り場を兼ねた博物館があり、ここで概要の説明を受けたあと、ガイドに従って砂漠地帯の岩場に分け入っていく。ハーイル地方の岩絵は、およそ1万年前から描かれるようになったと考えられ、現時点では中東最大規模の岩絵となっている。本格的な研究が始まったのは1970年以降であるが、様々な動物や狩りの様子が克明に描かれており、その種類などから当時と現在のこの地の気候の違いなどもうかがい知れることが、高度な芸術性と併せて顕著な普遍的価値を有するとして評価され、登録に漕ぎつけた。

岩絵群は2か所に分かれており、バスで5分ほど移動して2つ目の岩絵群を観察した。ここでは筆者のグループ以外の観光客の姿はなく、交通の便が悪いためかまだ観光資源として重要な役割を果たしているとは言い難かったが、見て回った岩絵は非常に良好な状態で残されており、興味が尽きなかった。



写真3 世界遺産ジュッバへの道路標識
(筆者撮影 2024年12月31日)



写真4 動物や狩人が描かれた岩絵
(筆者撮影 2024年12月31日)

先史時代の岩絵の世界遺産は、世界各地に分布しており、これまで「ターヌムの岩絵群」(スウェーデン)、「コア溪谷とシエガ・ベルデの先史時代の岩絵遺跡群」(ポルトガル・スペイン)、「イベリア半島の地中海沿岸の岩絵」(スペイン)、「ヴァルカモニカの岩絵群」(イタリア)などを実際に訪れたことがあるが、それら第一級の岩絵群と比しても狩りの様子や当時の気候を偲ばせる動物の生き生きとした姿は遜色のない芸術性を有しているように感じた。

2.5 アル=ヒジュルの考古遺跡 (マダイン・サーレハ)

次に訪れたのが、バスでおよそ半日かけて移動した「アル=ヒジュルの考古遺跡 (マダイン・サーレハ)」である。サウジアラビアで初めての世界遺産であるとともに、現在サウジアラビア政府が最も力を入れている観光地でもある。拠点となるのは人口5万人余りのアルウラという町で、近郊に空港も開設され、現在、リヤドとドバイからの航空便がある。現地に着いて驚いたのは、迫力ある岩山に寄り添うように多数の高級リゾートホテル群が散在していることである。すでにアジアを代表する高級ホテルチェーンである「バンヤンツリー」(拠点; シンガポール) や世界的高級リゾートホテルチェーン、アマンリゾートの第二ブランドである「ザ・チェディ」などが進出しているほか、やはり高級ホテルチェーンで知られるシックスセンスなど今後の開業を予定している。筆者が宿泊したのは、中東でリゾートホテルを展開するサハリグループの「サハリ・アルウラホテル」で、岩山を背景にコテージが並ぶ高級リゾートホテルであった。

マダイン・サーレハ(アラビア語で「サーリフの町」)は「ヘグラ」とも呼ばれ、ヨルダンにある古代遺跡であるペトラを築いたナバテア人がペトラから南へ500kmほど離れた地に築いた広大な古代都市の遺跡である。岩山をくり抜いて築かれた墓地や集会所、岩に穿たれた古代の碑文などがかなり広いエリアに散在しており、それらを結ぶシャトルバスがビジターセンターから観光客を遺跡に運んでいる。各遺跡でもガイド付きのミニバスで遺跡の見どころを巡るといのように、システムチックな受け入れ態勢が整備されている。それぞれの遺跡はどれも見どころが多く、一日ではまわりきれないほどの充実度を誇っている。また、熱気球で上空か

ら壮大な岩山群を見下ろすツアーも用意されている。

さらに、アルウラの町も古い街並みが観光用に整備され、飲食店や雑貨店など観光客向けの店舗が充実しており、政府が観光客誘致に力を入れているのが伝わってくる。



写真5 世界遺産「ジャバル・イスリム」
(筆者撮影 2025年1月1日)



写真6 アルウラで宿泊したホテル
(筆者撮影 2025年1月1日)

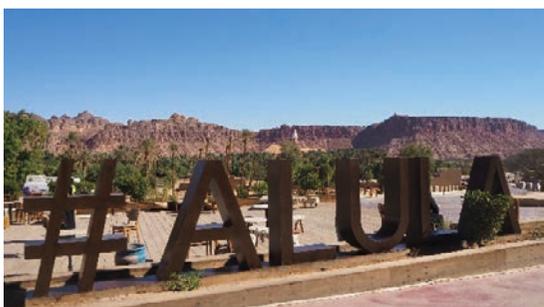


写真7 アルウラの町にある文字モニュメント
(筆者撮影 2025年1月1日)



写真8 整備されたアルウラの町
(筆者撮影 2025年1月1日)

また、アルウラの郊外の岩山に隣り合うように建つ、世界最大の鏡の建造物である「マラヤコンサートホール」も訪問客から注目を集めている観光資源である。全面鏡張りで周囲の岩山を映していて、どれが実景でどれが反射した景色なのか判別がつかない、世界に二つとない不思議なモニュメントである。見学には予約が必要で、今回の調査では予約が取れず直接間近で見ることはできなかったが、これも王国が主導して誘致したプロジェクトであり、この砂漠の驚異はこれからさらに知名度を上げるに違いない。

この地区は、イスラムの経典であるクルアーン（コーラン）では、「この地の民は使徒の警告を聞き入れず、罰を受けた」と記されており（井筒俊彦訳『コーラン』（中）、岩波文庫、p.71）、イスラム教徒にとっては忌むべき地とされ、壮大な古代遺跡があるにもかかわらず、長い間サウジアラビア人も含めたイスラム教徒が寄りつく地ではなかった。しがらみのない非イスラム教徒である欧米人を中心とした外国人にターゲットを絞ったのには、こうした背景もあるようだ。ホテル群のさらなる展開や空港の機能強化など国策でさらに観光地化が進めば、

アラビア半島では珍しい特上の「砂漠リゾート」が誕生しそうな勢いである。

2.6 メッカの玄関にあたる歴史都市ジェッダ

ジェッダ (Jeddah) はリヤドに次ぐサウジアラビア第二の都市であり、内陸部にあつて砂漠に囲まれたリヤドとは異なり、紅海に面した港湾都市である。そして、世界遺産の正式名称にも入っているとおり、イスラム教の聖地メッカ（現地語ではマッカ）の玄関としての役割を長い間果たしてきた。

メッカへの巡礼は一年中行われているが、毎年6～7月のハッジ（大巡礼）の時期になると世界中からイスラム教徒がここジェッダを経由してメッカに向かう。イスラム教徒は中東・北アフリカに多い印象があるが、世界最大のムスリム人口を抱えるのはインドネシア（23,600万人、2018年現在）、次いでパキスタン（20,877万人）、インド（19,403万人）、バングラデシュ（14,527万人）、ナイジェリア（10,149万人）など、サウジアラビアから見て遠方の国々も多く、陸路や海路以外にも空路が重要な交通手段になっている。そのため、空の玄関口にあたるキング・アブドゥルアズィーズ国際空港は、都市の規模に比してきわめて大規模な空港となっており、メッカへの巡礼者専用のハッジ・ターミナルまで存在する。ちなみに、OAG（オフィシャル・エアライン・ガイド）が公表している国際航空路線の路線別座席提供数の2024年におけるランキングの第2位に、カイロ発ジェッダ行きが年間550万席でランクインしている（第1位は香港発台北行きで680万席）。その多くをハッジ目的の乗客が占めていることが容易に推察できる。

こうした巡礼者を迎えるためだけでなく、中東における交易・金融の拠点として栄えた歴史があるだけに、ジェッダには伝統的な建物が密集する旧市街があり、その一角が世界遺産に登録されている。



写真9 ジェッダの旧市街（筆者撮影 2025年1月3日）

近代化の過程でジェッダの町並みのほとんどは高層ビルが立ち並ぶ現代的な姿に変わってしまったが、アルバラド地区は白い漆喰の壁に独特の木造の出窓がついた伝統的な家並みが残されており、世界遺産に登録されたこともあつて、現在政府主導で地区内の各地で修復が進んでいる。通りを歩くと、修復していることを示す工事中的の表示を出した建物がいくつも見られ

て、修復がさらに進めば魅力的な観光地になるだろうという予感がした。街角のいたるところに国が設置した野良猫のための給餌施設（Cat Feeder Station）があり、のびのびと猫が街角に溶け込んでいるのも、今の時代、格好の「映えスポット」になりそうだ。

2.7 開放されつつあるメディナと異教徒を拒むメッカ

今回の訪問では、メッカ、メディナというイスラム教の二大聖地のうち、メディナを訪れた。メディナの町に非ムスリムが入れるようになったのは2019年からである。メディナは前述の通り、預言者ムハンマドの没した地であり、そのあとに「預言者のモスク al-Masjid an-Nabawi」が建てられており、大巡礼ではメッカへ向かう前にこちらに礼拝に訪れる巡礼者も多い。預言者のモスクは現在も異教徒の礼拝は禁止されており、かろうじて敷地のギリギリまで入ることができる⁴。広場で礼拝する巡礼者たちも間近に見られるし、喧噪やクルアーンの一節を唱えるアザーンも聞こえてくるので、聖地の雰囲気は味わえる。少し先に見える緑のドームの下がムハンマドの霊廟である。モスクの周囲には巡礼者のための土産物店が並び、特に名産のデーツ（ナツメヤシの実）を売る店も多い。また、さらにその周辺には巡礼者のためのかなり立派なホテルが立ち並び、一見すれば普通の観光地のようでもある。



写真10 預言者のモスクの広場
(筆者撮影 2025年1月2日)



写真11 クバ・モスクに向かうムスリム
(筆者撮影 2025年1月2日)

メディナにはもう一つ、巡礼者が多数訪れる「クバ・モスク (Quba Mosque)」がある。世界で最初に建てられたイスラム教のモスクであり、こちらも以前は異教徒は立入禁止であったが、2024年から入場が許可されるようになった。広大な駐車場には隣国のヨルダンなどから遠路走行してきた巡礼者用の観光バスが多数停められており、次々と巡礼者がモスクに吸い込まれていく。筆者も巡礼者に混じってモスクに入場し、一心に祈りをささげる巡礼者の様子を間近にみる事ができた。クバ・モスクと預言者のモスクはおよそ3 km離れており、その間に巡礼者向けの散策路が結んでいる。

メディナには、他にもイスラム最大の戦いの一つ「ウフドの戦い」(西暦625年)で知られるウフド山や、その麓にある、戦いに敗れた殉教者を葬ったウフド殉教者広場など、ムハンマ

ドにちなんだ巡礼地がいくつもあり、それらを異教徒でも見てまわることができる。

一方のメッカは、カーバ神殿の周りをぐるぐる回る巡礼者の姿がよく映像で伝えられるため、異教徒にとっても知名度、そして好奇心を掻き立てられるという点で観光地としても第一級だと思われるが、こちらはメッカの町の入口に検問があり、イスラム教徒以外は町にすら入れないというほど厳格である。

しかし、クバ・モスクへの入場が解禁されたように、観光立国に舵を切るサウジアラビア政府が方針を変更し、ハッジ以外の時期にメッカへの入場を認める時代が来るかもしれない。

2.8 サウジアラビアの観光の今後の展望

わずか1週間強の滞在ではあったが、まだまだヴェールに包まれている部分が多いサウジアラビアの観光に関するポテンシャルは、想像以上に高いことを実感した。本論では詳述していないが、ジェッダが面している紅海はダイビングの聖地として世界中のダイバーが訪れているし、現在国家プロジェクトとして進められている都市計画「NEOM」は、砂漠を横断して高さ500メートルのビルを170kmにわたって建設するという夢物語のような計画で、本当に実現するかどうかは未知数だが、もしこれが完成すれば世界に例のない景観が出現することになる。このプロジェクトは、2025年5月に訪れた大阪・関西万博のサウジアラビア館でも展示されていたので、単なる「夢」ではなく、実現に向けて本気であることは間違いない。

今回、ツアー全体を通して通訳と道案内を担ってくれた20代のガイドは、以前日本の大学の工学部に留学し、IT関係の勉強を重ねていた。しかし、帰国後は国の観光振興政策でガイドが優遇されていることを知り、観光ガイドに「転身」したとのことである。こうしたところにも国の観光への力の入れ具合がうかがえる。また、ガイドの兄が国営のサウジアラビア航空（サウディア）に勤めているということで取材に応じてもらった。サウディアは、2006年に本拠地であるジェッダから首都リヤド経由で関西空港に乗り入れた実績がある。このときは、わずか1か月で運休になってしまったが、彼によると数年内に再び日本へのフライトを運航する予定があるとのことであった。



写真12 サウディアの航空機（筆者撮影 2024年12月30日）

また、2025年夏にサウジアラビアで世界最大規模のeスポーツの大会「eスポーツ・ワールド

ドカップ」が開催されたのに加え、今後初めて開かれる「オリンピック・eスポーツ・ゲームス」の第1回の開催地も同国に決定している。2030年には大阪・関西万博の次の登録博（総合的なテーマを扱う大規模な国際博覧会）が首都リヤドで開催予定であるし、2034年に予定されているサッカー・ワールドカップの開催もサウジアラビア単独開催が決まった。オープン時期はまだ未定だが、日本発のアニメ「ドラゴンボール」の世界初のテーマパークの建設も進んでいる。このようにサウジアラビアでは、今後10年間、世界的な注目が集まるイベントに事欠かない状況である。

さらに、少し話がそれるが研究の分野でも進展が著しく、2025年5月にイギリスの教育専門誌「Times Higher Education」が発表した大学ランキングでは、サウジアラビアから初めてキング・アブドゥラ科学技術大学（KAUST）がトップ200に食い込んだ⁵。

エネルギーによる日本をはじめとした先進国とのつながり、大勢の巡礼者を永年迎え入れてきたおもてなしの習慣、豊富なオイルマネーを国王の鶴の一声で投入できる迅速な政策決定のプロセスなど、サウジアラビアの観光立国へのシフトチェンジの先行きは今のところ視界良好である。今後どのような具体的な動きを見せるのか注視したい。

3. 偉大なる王国ペルシャの遺産 イラン

3.1 実は観光大国で世界遺産大国の側面も

湾岸諸国の一員で世界的な産油国（2024年の原油生産量は世界第5位、中東ではサウジアラビアに次ぐ）である一方、古代のシルクロードのルートが国土を横切り、多くの民族の興亡が繰り返されたイラン。人口およそ9,000万人、面積164.8万km²（日本の4.4倍）の大国で、世界遺産の数もきわめて多い（表3）。

表3 イランの世界遺産一覧

	遺産名	分類	登録年
1	チョガ=ザンビール	文化遺産	1979年
2	ペルセポリス	文化遺産	1979年
3	エスファハーンのイマーム広場	文化遺産	1979年
4	タフテ・ソレイマーン	文化遺産	2003年
5	パサル・ガダエ	文化遺産	2004年
6	バムとその文化的景観	文化遺産	2004年
7	ソルターニーエ	文化遺産	2005年
8	ベヒストゥン	文化遺産	2006年
9	イランのアルメニア人修道院建造物群	文化遺産	2008年
10	シューシュタルの歴史的水利施設	文化遺産	2009年
11	アルダビールのシャイフ・サフィーアッディーン廟の歴史的建造物	文化遺産	2010年
12	タブリーズの歴史的バザール施設	文化遺産	2010年

13	ペルシャ式庭園	文化遺産	2011年
14	エスファハーンのマスジェド・ジャーメ	文化遺産	2012年
15	ゴンバド・パーブース	文化遺産	2012年
16	ゴレスタン宮殿	文化遺産	2013年
17	シャフリ・ソフタ	文化遺産	2014年
18	メイマンドの文化的景観	文化遺産	2015年
19	スーサ	文化遺産	2015年
20	ルート砂漠	自然遺産	2016年
21	ペルシャ式カナート	文化遺産	2016年
22	ヤズドの歴史都市	文化遺産	2017年
23	ファールス地方のササン朝考古景観	文化遺産	2018年
24	ヒルカニアの森林群	自然遺産	2019年
25	イラン縦貫鉄道	文化遺産	2021年
26	ハウラマン／ウラマナトの文化的景観	自然遺産	2021年
27	ペルシャのキャラバンサライ	文化遺産	2023年
28	ハグマターナ	文化遺産	2024年
29	ホッラマーバード溪谷の先史遺跡群	文化遺産	2025年

筆者作成

遺産登録数29件は世界で第10位に位置し、日本より3件多い。また、29件のうち27件が文化遺産と、圧倒的に人類の歴史に深くかかわった遺産が占めている。そのため、先史時代の遺跡から歴代のペルシャ王朝の王都や宗教施設、そして20世紀に建設された鉄道までバラエティに富んだ遺産群となっている。

アケメネス朝に始まり、セレウコス朝、ササン朝、ウマイヤ朝、セルジューク朝、そして1979年に滅亡したパフラヴィー朝まで数えきれないほどの王朝が興亡し、西アジアの盟主としての地位も長かった「ペルシャ帝国」の遺産がいかに貴重なもの揃いであるかを示しているともいえる。

イランの正式国名は、「イラン・イスラム共和国」。厳格なイスラム国家で国民のおよそ90%がシーア派。旅行者も女性は肌や髪を露出しないようにする必要があるし、飲酒も一切禁止で、そもそもどこにも酒類は販売されていない。一方、国民の生活にはペルシャ発祥の宗教であるゾロアスター教の影響が色濃く残っている。今でもイランの新年は春分のころに始まるが、これもゾロアスター教の宗教儀礼がもとになっている。また、ゾロアスター教の教義である善悪二元論や最後の審判といった思想は、のちにユダヤ教やキリスト教に大きな影響を与えたと考えられている。

イランもサウジアラビア同様、観光に力を入れている。ホテルの新規建設や観光地の整備も進んでいる。2019年にJICAが行った現地調査のレポート（「イラン国 タブリーズ及びその周辺地域における観光開発戦略策定に係る情報収集・確認調査 ファイナルレポート」）によると、2009年におよそ200万人だったイランへのインバウンドは、2019年には880万人へ激増、

コロナ禍を経て2023年は590万人となっている。ただし、イランの観光は国際情勢に左右されることが多く、近年はロシアのウクライナ侵攻や後述する2025年のイスラエルとの紛争などの影響で伸び悩んでいると考えられている。

そんな中、2023年暮れから24年の年始にかけて10日ほどイランの世界遺産の一部を調査した。訪問したのは、表3のうち、2. ペルセポリス、3. エスファハーンのエマーム広場、5. パサル・ガダエ、13. ペルシャ式庭園、14. エスファハーンのマスジェデ・ジャーメ、16. ゴレスタン宮殿、21. ペルシャ式カーナート、22. ヤズドの歴史都市、の8件である。



図2 イランの概略図（筆者作成）

3.2 中東を代表する古代遺跡、ペルセポリス

イラン南部の中心都市で国際便が発着する空港もあるシーラーズの町から車でおよそ2時間、砂漠に緑や丘陵が混じる地帯に、中東で最大級の遺跡の一つ、ペルセポリスがある。ギリシャ語で「ペルシャ人の都」という意味の通り、ペルシャを初めて統一し王朝を打ち立てたアケメネス朝ペルシャのダレイオス大王が築造した都の遺跡であり、宮殿をはじめ宝物殿、謁見の間など多くの建物の遺構が小高い丘の上に広がっている。紀元前520年ごろに建設が始まり、ダレイオスの死後も治世を引き継いだクセルクセス1世、アルタクセルクセス1世が建設を継続した。しかし、紀元前331年にマケドニアから侵攻したアレクサンドロス大王に徹底的に破壊され、それ以後2300有余年にわたって遺跡としてこの地に立ち続けてきた。巨大な人面有翼獣の神が置かれたクセルクセス門や宮殿の壁画に描かれた様々な民族のレリーフなどが、2500年も前に造られたと思えないほどきれいに残されている。



写真13 ペルセポリスのクセルクセス門
(筆者撮影 2024年1月2日)



写真14 周辺民族の朝貢を描いたレリーフ
(筆者撮影 2024年1月2日)

ペルセポリスは遺跡が目白押しのイランでも最も人気のある観光地で、入口には広大な駐車場があり、欧米人と思しき団体の観光客が多数訪れている。入場チケットは2023年末時点で20万イランリアル（当時のレートで670円前後）、また遺跡内にある博物館への入場にも20万リアルが必要である。

イランへの観光は国内の公共交通機関が便利とは言えないので、首都テヘランで手配するバスツアー、あるいは主要都市間は空路などで移動しその町でガイド付きツアーを手配するのが一般的だ。テヘランは、空の玄関であるエマーム・ホメイニー国際空港に中東諸国はもちろん、欧州の多くの主要都市、アジアでは中国、タイ、マレーシア、インドなどからの航空路が開設されている。以前はイラン航空が成田路線を運航していたが、2011年に停止となっている。イランはアメリカなどから経済制裁を受けており、米国資本のホテルやチェーン店は全く存在せず、欧米系のカード会社のクレジットカードの使用もできない。したがって世界のどの街角でも目に入るスターバックスやマクドナルドの看板も全く見られない。



写真15 キュロス2世の陵墓
(筆者撮影 2024年1月2日)



写真16 イラン高原を貫く高速道路
(筆者撮影 2024年1月2日)

ペルセポリスから東へ車で約1時間、アケメネス朝ペルシャの最初の首都パサル・ガダエも世界遺産に登録されている。ペルセポリスと同じ地域にあるものの国際的な知名度の差は圧倒

的で、観光客の姿もペルセポリスに比べると格段に少なかった。ここでは、アケメネス朝の建国者で初代の王であるキュロス2世の陵墓が最大の見どころである。白い石壇をピラミッド状に積み上げた上に大型の石棺のようなものがある独特の墓地であり、かつては地元の人から古代イスラエルの王で様々な伝説を持つソロモンの墓と呼ばれていたという。ここも広大なエリアに遺跡が点在しており、観光用のカートで宮殿跡やかつての神殿を見て回ることができる。

なお、シーラーズの町には、2022年ごろからインスタグラムなどのSNSで一躍有名になり、イランのイメージを変えたと言われるモスクがある。通称「ピンクモスク」、あるいは「ローズモスク」と呼ばれるそのモスクの正式名称は「マスジェデ・ナスィーロール・モルク」。早朝、中庭に面した礼拝堂に嵌め込まれた七色のステンドグラスに光が差し込み、内部の床や柱が虹色に輝くさまは、世界中に拡散され、シーラーズ滞在中の朝食直後に訪れた時も、他の観光地とは違い、女性の姿が圧倒的に多く、他ではあまり見かけなかった日本人観光客も目にした。夏よりも冬の方が太陽の高度が低い分、礼拝堂の奥にまで光が届く。訪れた1月初めに観光客が押し寄せていたのもそうした理由からだろう。たった1枚の写真が国のイメージを変えるということが目の前で起きている不思議さと、もしかしたらペルセポリスよりも吸引力があるかもしれない怖さを同時に感じる体験であった。このモスクの築造は19世紀後半で、世界遺産とはなっていない。



写真17 早朝の「マスジェデ・ナスィーロール・モルク」（筆者撮影 2024年1月2日）

3.3 各地に影響を与えた水のマジック―ペルシャ式庭園

イランには水にまつわる世界遺産が多い。国土の多くが砂漠に覆われたイランでは、水を制することが政治や経済、そして文化にとっても最重要の課題であった。「シューシュタルの水利施設」も、「ペルシャ式カナート」も農業用水として乏しい水を活かす先人の知恵の結晶である。

そしてイランの王族の宮殿や邸宅、宗教上の施設などに設けられた庭園にも必ず水が引か

れ、庭園の主役となった。国内に点在する典型的なペルシャ式の庭園が2011年に世界遺産に登録されている。今回そのうちの2か所（厳密には、庭園の痕跡が残るパサル・ガダエの庭園跡も観ているので、それを入れれば3か所）を見学した。最も時間をかけたのが、ペルセポリス探勝の基地となっているシーラーズの町にある「エラム庭園」である。宮殿を中心に糸杉の並木やバラ園などが整備されているが、やはり特徴的なのは宮殿の前にある池とそこから一直線に階段状に伸びる水路であろう。こちらは外国人観光客だけでなく、主に地元のイラン人と思われる家族連れなどが散策に興じていたのが印象的であった。



写真18 エラム庭園の水路
(筆者撮影 2024年1月2日)

もう1か所、シーラーズに来る前に、テヘランから3時間ほどのところにある町、カーシャーンの郊外にある「フィーン庭園」にも足を運んだ。アッバース1世（サファヴィー朝の第5代の王）が建てた離宮で、王が過ごした王宮として使われた建物と大きな池、糸杉の並木とこちらも典型的なペルシャ庭園である。乾燥した砂漠に囲まれた地域で水を引いた庭園を造ることは贅沢の極致であり富の象徴でもある。そして水を中心に設計されたこの庭園様式は、その後ユーラシア大陸のあちこちに広がったことも見逃せないし、それこそが世界遺産に登録された普遍的な価値の大きな部分である。

例えば、インド・ムガル帝国の皇帝が愛妾のために造営した、インドを代表する建築でもあるタージ・マハルはペルシャ式庭園の影響を明確に受けていることが、その場に立てばたちどころに伝わってくる。霊廟の前にまっすぐ一本の水路が通っているのはまさしくペルシャ様式の典型例である。さらに、スペインで最後まで続いたイスラム王朝であるグラナダ朝が建築技術の粋を集めて造った世界遺産「アルハンブラ宮殿」もまさに水の趣向を凝らしたペルシャ式の様式を色濃く映している。ペルシャの影響は唐の時代の中国の文物や奈良・東大寺の正倉院御物にも見られるほど各地に伝播しているが、庭園ひとつとってもその影響力は強力であり、あらためてイランの世界遺産の「実力」を示すものである。

3.4 ペルシャ繁栄のもうひとつのシンボル

シーラーズからおよそ半日かけてバスで移動し、イラン中部の古都、エスファハーンに到着した。アケメネス朝の繁栄からおよそ2000年、再びペルシャが強大な帝国を形成した時代が

訪れた。それがサファヴィー朝の王で前述のフィーン庭園の造営者でもある、アッバース1世、別名アッバース大帝の時代である。

彼が都に定めたのがエスファハーンであり、大帝は壮大な町を自ら設計して整備、アジアとヨーロッパを結ぶ交易の拠点としても繁栄をきわめた。この地を訪れた商人や外交使節はその繁栄ぶりを目にし、「エスファハーン・ネスフェ・ジャハーン (Esfahan Nesf-e Jahan)」とこの街を称した。「エスファハーンは世界の半分」という意味の最大の賛辞である。

この栄華を今に伝えるのがこの町にある2件の世界遺産である。ひとつは、街の中心に広大なエリアを占める「エマーム広場」、そしてもうひとつがそこから少し離れた場所にあるモスク、「マスジェデ・ジャーメ」である。



写真19/20 エスファハーンのエマーム広場の昼と夜 (筆者撮影 2024年1月4日)

エマーム広場は長辺500メートル、短辺160メートルの細長い長方形の周りを2階建ての回廊が取り囲む壮大な空間で、広場を取り囲むように王の寺院とも呼ばれるモスク「マスジェテ・エマーム」、同じくサファヴィー朝の寺院建築の傑作「マスジェデ・シェイフ・ロトゥフオッラー」、そして上層階にテラスを設け独特の形をした「アーリー・ガープー宮殿」が景観をさらにダイナミックにしている。広場は庭園となっており、やはり真ん中に池がある。その周囲を観光客を乗せた馬車が優雅に走る。回廊の一階部分は商店になっており、絨毯や貴金属などの店が軒を連ねる。まるでアッバースの時代にタイムスリップしたような雰囲気がよく残されている。夕暮れになると、回廊にあかりが灯り、昼間とは全く異なる幻想的な景観へと一変する。

エマーム広場が様々な建物の集合体のようにになっているのに比して、「マスジェデ・ジャーメ」は、モスク一つが単独で世界遺産に登録されている。ペルシャの寺院建築の集大成と呼ばれるほどの価値があるためである。様々な時代の礼拝堂が折り重なるように続き、ドームの内側や壁の装飾も見飽きないほど美しい。あらためてペルシャ文化の豊かさ、繊細さに驚きを感じるような建築である。

このように、イランは比較的歴史が新しい首都テヘラン以外に、シーラーズやエスファハーン、この論考では触れていないが旧市街が世界遺産に登録されているヤズド、今回の訪問先に

は入っていないが、バザールそのものが世界遺産になっている北西部の町タブリーズなど、歴史を刻んだ観光資源に恵まれた都市がいくつもあるのが特徴であり、イランの観光における強みである。訪問時、一番最初に見たテヘラン市内の世界遺産「ゴレスターン宮殿」も見ごたえがあったし、帰国の直前に見学・礼拝したイスラム革命の指導者でイラン・イスラム共和国樹立の立役者であるエマーム・ホメイニー廟も、世界遺産ではないが、イランの歴史を考えるうえで重要なモニュメントである。

3.5 イランを取り巻く国際情勢と観光

筆者がイランに滞在中の2024年1月、南東部のケルマンという町でイラン革命防衛隊の司令官の墓地で行われた追悼行事で爆発事故があり、100人近くの市民が死亡した。イラン当局はテロ事件だと断定し、国内に緊張が走った。筆者はエスファハーンに滞在していたが、その影響で一部の観光施設が閉鎖され入場できないという事態に遭遇した。

さらに帰国後1年以上を経た2025年6月13日、パレスチナとの紛争状態が続いていたイスラエルがイランの軍事施設などを攻撃、21日にはアメリカ軍がイランの核関連施設にミサイル攻撃を加え、中東全体に戦火が広がるのではないかと懸念が世界に拡散した。幸いその後は戦闘は収まっているが、同年9月現在、外務省によりイラン全域に渡航中止勧告（レベル3、なお一部はレベル4の退避勧告）が発出されており、現実には日本からイランへの観光旅行は不可能となっている。

イランは、イスラエルと対峙するイエメンのフーシ派や、レバノンのシーア派イスラム主義の政治・武装組織ヒズボラを支援していると言われ、アメリカやイスラエルとは敵対関係に近い状況が続いている。さらに、2015年に結ばれたいわゆる「イラン核合意」により解除された国連による対イラン制裁は、2025年9月、再び復活した。輝かしい歴史を刻んだペルシャの遺産群は、国際情勢によって安全な訪問が難しくなっている。

現地でお世話になったイラン人の観光ガイドは、日本での留学・就労の経験があり、きわめて親日的な方であった。アメリカと断交状態とはいえ、そのアメリカの同盟国である日本への印象は概して悪くない。1983～84年に日本で放送されたNHKの朝の連続テレビ小説「おしん」はイランでも放送され、放送時間は街なかから人通りが消えるほど人気があったと言われ、今でもスマホの着信メロディーに「おしん」のテーマを選んでいいる人があるほどである。

こうした関係を観光に結び付けられるのか、あらためて考える機会になったイランへの調査行であった。

4. 三大一神教の聖地 イスラエルとパレスチナ

4.1 紛争の震源地、イスラエル

2023年9月に始まったイスラエルとパレスチナの戦闘は2025年10月現在、アメリカなどの

仲介で和平への一歩が始まったもののまだまだ予断を許さない状況にある。今やイスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相や彼と深い関係を保つトランプ米大統領の紛争に関する言葉一つひとつに世界の耳目が集まる状態が続いている。このイスラエル、そして対立するパレスチナの双方にも世界遺産がある。しかも、どちらにも世界的に名高い有名な宗教施設があり、両者の戦闘により世界遺産への影響が心配されるという側面もある。

ユダヤ王国がローマ帝国に滅ぼされて後、長い間国家を持たなかったユダヤ人がシオニズム運動の高まりで父祖の地に移住が進み、第二次大戦後パレスチナ地方に建国したのが、現在のイスラエルである。しかし、ユダヤ人がこの地を追われて以降代わりに住み着き、多くがイスラム教徒となったパレスチナの人々もこの地を与えられたことから、以後数十年間この地は、ユダヤ民族とパレスチナ人との紛争の地となってきた。第4次まで続く中東戦争の発信地もまさにこの地域である。

表4 イスラエルの世界遺産

	遺産名	分類	登録年
1	マサダ	文化遺産	2001年
2	アッコ旧市街	文化遺産	2001年
3	テルアビブの白い都市—近代化運動—	文化遺産	2003年
4	聖書ゆかりの遺丘群—メギド、ハツォル、ベエル・シェバー	文化遺産	2005年
5	ネゲヴ砂漠の香の道と都市群	文化遺産	2005年
6	ハイファと西ガリラヤのパハーイー教聖地群	文化遺産	2008年
7	人類の進化を示すカルメル山の遺跡群：ナハル・メアロット（ワディ・エル＝ムガーラ）の洞窟群	文化遺産	2012年
8	ユダヤ低地にあるマレシャとベト・グヴリンの洞窟群：洞窟の大地の小宇宙	文化遺産	2014年
9	ベート・シェアリムのネクロポリス—ユダヤ人の再興を示す—大中心地	文化遺産	2015年

筆者作成

表5 パレスチナの世界遺産

	遺産名	分類	登録年
1	イエス生誕の地：ベツレヘムの聖誕教会と巡礼路	文化遺産	2012年
2	オリーブとワインの地パレスチナ—エルサレム地方南部バティール	文化遺産	2014年
3	ヘブロン／アル＝ハリール旧市街	文化遺産	2017年
4	古代エリコ／テル・エッ＝スルタン	文化遺産	2023年
5	聖ヒラリオン修道院／テル・ウンム・アメル（※ガザ）	文化遺産	2024年

筆者作成

表6 ヨルダン申請による世界遺産

	遺産名	分類	登録年
1	エルサレム旧市街とその城壁群	文化遺産	1981年

筆者作成

イスラエルとパレスチナに存在する世界遺産は表4、5の通りだが、イスラエルに9件、パレスチナに5件の他、最も重要な場所と言ってよい「エルサレム旧市街」は、所属地が確定せず、やむなく隣国ヨルダンによって申請されたという事情が、この地の複雑さを物語っている(表6)。

2023年8月、このうち、エルサレムの他、イスラエル側では「マサダ」、「テルアビブの白い都市」「聖書ゆかりの遺丘群—メギド、ハツォル、ベエル・シェバ(※このうちベエル・シェバを訪問)」、「ユダヤ低地にあるマレシャとベト・グヴリンの洞窟群：洞窟の大地の小宇宙」、パレスチナ側では、「イエス生誕の地(ベツレヘム聖誕教会)」、「古代エリコ/テル・エッ=スルタン」のあわせて7件の世界遺産を訪問した。

4.2 イスラエル軍にとって特別な地、マサダ

ヨルダンから申請された「エルサレム旧市街」は別として、イスラエルで最初に世界遺産に登録されたのは、「マサダ」である。死海を眼下に望む標高およそ400メートルほどの岩山の上に位置するマサダは、イスラエル国民にとっては特別な場所である。というのも、紀元70年、ユダヤ王国とローマ帝国の戦いでエルサレムが陥落し、難を逃れた1,000人ほどのユダヤ人が要塞となっているマサダに籠城したものの周囲を包囲され、敗北が確実になって全員で自決した、ユダヤ民族にとっては忘れることができない悲劇の地であるからだ。

こうした歴史から、イスラエル国防軍の入隊宣誓式がここマサダで行われるようになった。入隊する者は、要塞となった山頂で、「マサダは二度と陥落せず」と唱和して、再び民族が離散することがないように誓うとされている(市川裕監修「ユダヤとは何か。」、2012:P49)。中東最強と言われるイスラエル軍の強さの秘訣がこの世界遺産にあると言ってよいのである。

現在、マサダは著名な観光地となっていて、麓から新型のロープウェイで一気に山頂まで上がることができる。もともとユダヤ王の離宮があったため、その遺構も残されており、これらを見て歩けるのだが、日陰が全くなく、くらくらするような猛暑である。ここから世界で最も水面の標高が低いとされる死海(死海は東岸はヨルダンに、西岸はイスラエルとパレスチナに属する)が一望できるが、実は死海は水位が以前よりずっと下がってきており、湖というよりは細長い川のようにしか見えない。ちなみに、観光資源という点では、死海はかなり大きなウエイトを占めており、死海の沿岸には大型のリゾートホテルが幾棟も建っている。塩分濃度が海水の10倍ほどもあり、簡単に全身が浮いてしまうため、新聞や雑誌を読みながら死海に浮かぶ観光客の写真が観光パンフレットなどによく掲載されており、今回の調査行で筆者も体験した。ただし前述のように水量が少なく、浮かぶほどの水深の地点を探すのに苦労した。



写真21 世界遺産マサダ
(筆者撮影 2023年8月23日)



写真22 イスラエル側から見た死海
(筆者撮影 2023年8月22日)

4.3 テルアビブの白い都市

イスラエルは、エルサレムを首都と定めているが、国際的には認められておらず、実質上の首都と言ってよいのは経済都市であり港町でもあるテルアビブとなっている（ただし、イスラエルの立法府、司法府の中心は西エルサレムにある）。日本をはじめ、主要国の大使館もほとんどがテルアビブにあるし、海外との玄関となっている国際空港（ベングリオン国際空港）もテルアビブにある。

エルサレムはイスラム勢力からこの地を奪還するべくヨーロッパ諸侯から11～13世紀に十字軍が派遣されたことからわかるように、キリスト教徒にとって最も重要な巡礼地となっており、航空機がなかった時代は、現在のテルアビブの市域となっているヤフォが各地からの船が集まる古くからの港町であった。しかし、現在のテルアビブは、19世紀以降に都市化され、おもにドイツからシオニズム運動などでこの地にやってきた建築家などがビルや住宅を建設した。当時ドイツで流行していたバウハウス⁶という芸術デザイン運動の影響を受けた白くて直線的な建築が市の中心街の立ち並ぶようになり、この「白い都市」が世界遺産に登録されている。

特に集中しているのが、市中心部を東西に走るロスチャイルド通りで、集合住宅、個人の邸宅、商業ビルなど個性あふれる建築が、壁をはじめホワイトにほぼ統一されて立ち並んでいる。その数4,000棟あまりと言われ、世界でも稀に見るバウハウス建築の密集地帯であり、その普遍的価値が評価されて世界遺産に登録されている。



写真23 テルアビブのホワイトシティ
(筆者撮影 2023年8月26日)



写真24 ヤフォから見たテルアビブ
(筆者撮影 2023年8月23日)

4.4 キリストの生誕地、ベツレヘム

エルサレム、あるいはその周辺がキリスト教の聖地になっているのは、キリストの生地と没地がこの地にあるからである。そのうちパレスチナでは、イエスが生まれたとされるベツレヘムの地に建つ「聖誕教会」とその周辺のいくつかの教会、そしてエルサレムとベツレヘムを結ぶ巡礼の道が世界遺産に登録されている。

イスラエルが実効支配しているエルサレムとベツレヘムの間には、イスラエルとパレスチナ・ヨルダン川西岸地区の“国境”があり、検問所が設けられている。筆者が訪れた戦闘前の2023年夏にはパレスチナへ抜ける検問所はノーチェックで通過できた。また帰路は、少し車の列ができていたが、ここでも厳しいチェックもなく通り抜けられた。乗車していたのが外国人だけが乗る観光バスだったということもあろう。しかし、戦闘状態にある2025年9月現在では通過はかなり難しくなっているとされている。また、検問所とは別に、イスラエルとパレスチナの間には「壁」が築かれており、とても乗り越えられないくらい高く頑丈な造りになっている。そしていくつかの地点には、素性不明の画家、バンクシーが描いたとされる絵が残されており、そのうち最も有名なのが、天使が壁をこじ開けようとしている絵である。この絵は、壁があることへの、言い換えればイスラエルとパレスチナに分断があることへの痛烈な抗議のメッセージとなっている。



写真25 壁に描かれたバンクシーの絵

(筆者撮影 2023年8月25日)



写真26 ベツレヘムの聖誕教会

(筆者撮影 2023年8月25日)

ベツレヘムでバスを降りると、聖誕教会に向かっていくつか土産物店が並んでいる。そして目の前の大きな広場の向こうに教会らしからぬ要塞のような建物が見えてくる。これがキリスト聖誕教会である。中に入ると、聖誕の場所であるとされる地下洞窟を一目見たい人たちの行列ができていて、30分近く並んで洞窟に進み、周りの信者に倣って地面に手を置く。いってみれば、ここが今に続くキリスト教の原点ともいえる場所である。

聖誕教会に隣接して、聖カテリーナ教会があり、こちらでは各国からの巡礼者が聖歌を唱和していて、厳かな雰囲気が伝わってくる。イスラエル、パレスチナの紛争前までは毎年この教会でクリスマスに盛大なミサが執り行われ、それが世界中に生中継されていた。しかし、紛争

後はこの地を訪れる巡礼者は極端に減り、観光は事実上「消滅」し、ミサの中継も見られなくなった（2025年のクリスマスには3年ぶりにミサが開かれている）。平和を願うはずの宗教の聖地が戦乱で訪問できなくなっている逆説的な事象を私たちはどう受け止めればよいのか、あらためてこの地の重要性と複雑さを思い知らせてくれる存在である。

4.5 圧倒的なエルサレムの存在感

今回の訪問でもっとも胸が高鳴ったのは、やはり聖地エルサレムである。キリスト教徒にとってはイエスが十字架に懸けられて絶命後大地に降ろされた地、ユダヤ教徒にとってはかつてのユダヤ神殿の壁だけが残り、「嘆きの壁」として王国のよすがを偲ぶ地、そしてイスラム教徒にとっては預言者ムハンマドが天使を従え昇天した場所のあとに建てられた岩のドームが立つ地である。それらが集まっている、城壁に囲まれた旧市街は、キリスト教地区、イスラム地区、ユダヤ人地区、アルメニア人地区⁷に四分され、それぞれが分かれて暮らしており、全く雰囲気が異なっている。

嘆きの壁では、黒い帽子に長くひげを生やした正統派のユダヤ教徒らが一心に祈りをささげる姿のすぐ隣に立つことができる。岩のドームには異教徒は入れないが、周囲ではメッカに向かって祈りをささげる人の姿が見える。そしてキリスト教地区で象徴的なのが、イエスが十字架を背負って歩いた道、ヴィア・ドロローサ（Via Dolorosa）である。イエスが躓いた場所、鞭打たれた場所、母マリアに出会った場所などが標識で明示され、その場所ごとで祈りを捧げる人々の姿が見られる。道行きの終点となるゴルゴダの丘には聖墳墓教会が建ち、キリストの臨終の地を一目見ようと長い行列ができています。世界の三大一神教の聖地がすべてここに集まり、近接しながらそれぞれの宗教の巡礼者が訪れていること、そしてそれぞれの宗教の成り立ちを知れば知るほど、そのルーツは重なり合っていることが実感でき、それが複数の宗教にとっての聖地である所以だということも伝わってくる。筆者はどの宗教の信者にも当てはまらない、いわば究極の異教徒であるが、この地が長い間巡礼の地であるだけでなく、異教徒からの奪還の対象であったり、衝突の遠因であったりと、世界史を動かしてきたことが目の当たりにできるという意味で稀有な場所であり、その重みが伝わってくる。

さらに旧市街の周囲には、ダビデ王の墓、イエスの「最後の晩餐」の部屋、マグダラのマリアの教会など、聖書に描かれるエピソードの舞台が隣り合うように並んでいて、無宗教の部類に入る筆者でも胸に迫るものがあった。

一方で、ガイドブックや観光ガイドがまず説明しないことがある。それはわずか1km四方のエルサレム旧市街に300台もの無人カメラが備えつけられており、住民や観光客の動きを仔細に動画に収めているという事実である。監視しているのは、本来国際的には領土とは認められていない、東エルサレムを実効支配しているイスラエルの警察である。このこと一つをとっても、宗教の聖地が脆いかりそめの平和の上にかろうじて保たれていることが感じられる。



写真27 嘆きの壁

(筆者撮影 2023年8月23日)



写真28 旧市街に建つ岩のドーム

(筆者撮影 2023年8月24日)



写真29 聖墳墓教会のドームの真下にあるキリスト磔刑の地

(筆者撮影 2023年8月25日)

筆者は、バチカンのサンピエトロ大聖堂も、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂も、イスタンブールのブルーモスクも、あるいは日本の高野山や比叡山のような巡礼地へも足を踏み入れたことがあるが、それらとはまた一線を画す、「人類と宗教」という壮大なテーマを突き付けられる「正真正銘本物の聖地」であるように感じられた。そして、キリストの生地がイスラム教徒が多いパレスチナに、キリストの磔刑の地がユダヤ教の本拠であるエルサレムにあるという皮肉は、宗教だけで国境を切り分けられない世界の複雑さの象徴でもあろう。

なお、2024年に緊急登録されたパレスチナの「聖ヒラリオン修道院／テル・ウンム・アメル」は、ガザ地区で初めての世界遺産で、その登録にはイスラエルから攻撃を受け続けて廃墟が広がるガザを守るというメッセージが込められている。ガザ地区の中部、デイル・アル・バラの近くにキリスト教修道士ヒラリオン（291～371年）が設立したとされる修道院があったが、7世紀以降は廃墟となった遺構である。イスラエルからの攻撃により遺構が失われかねないことから、緊急対応により世界遺産登録されるとともに、危機遺産リストにも記載された。

エルサレムが世界遺産に登録され、今も危機遺産であり続けるのと同様、世界の紛争の震源

地にある世界遺産の持つ意味をあらためて考えさせるモニュメントと言えそうだ。

4.6 観光視点から考えるパレスチナとイスラエルの紛争

筆者が訪れた2023年8月には、わずかに1か月半後にハマスによるイスラエルへの侵攻とそれにイスラエルが対抗する形で始まり、今に至る泥沼の紛争になるだろう予感全くなかった。イスラエルで出会った人々もおおむね平和で紳士的であり、またイスラエルにはアラブ民族も人口の1割程度暮らしているが、彼らも穏やかに日常生活を送っていた⁸。しかし、何かきっかけがあれば一触即発どころか、ジェノサイドのような暴力的な戦闘が一気に表面化する。そして、せっかくコロナ禍から立ち直りつつあった、かの地の観光は、風前の灯火となった。



写真30 エルアル航空就航のポスター

(筆者撮影 2023年8月21日)

筆者が日本からイスラエルまで飛んだフライトは、2023年春に就航したばかりのイスラエルのフラッグキャリア、エルアル航空である。永年の悲願の末に就航がかなった路線は、戦闘により観光客が一気に消滅する事態となった。2025年9月現在、パレスチナのベツレヘム周辺は渡航中止勧告（レベル3）、イスラエル全土も不要不急の渡航中止勧告（レベル2）が出されており、観光で出かけるのは避けた方がよい状況である。まして旅行会社のツアーはレベル2であれば催行が不可能な状態となっている。

このように、航空路の充実や観光資源の整備の進行など観光の条件が整いつつある一方で、戦火が間近に迫る中東の将来は占うのが難しくなっている。

そしてこれは世界の今後を示唆しているともいえる。ここ数年、中東以外でも観光による訪問をためらうような状況が世界では起き続けている。仏塔が無数に並ぶ壮大な景観が広がる世界遺産「バガン」のあるミャンマーは、内戦が続いており渡航が事実上難しい。中国と台湾の「海峡」をはさんだ緊張も増している。2025年から二度目のトランプ政権になったアメリカは排外主義が幅を利かせ、入国審査のトラブルも多く、渡航のハードルが高くなった。「カナダを51番目の州に」というトランプの言葉はカナダ国民のプライドを傷つけ、アメリカのお得意様だったカナダ人のアメリカへの渡航は2025年5月以降かなり減少している。また、アジア人である我々日本人にとっても、かの国はアメリカンドリームを体現する「夢の国」のイメージからかけ離れてしまった。

中東の緊張状態は、ある意味では世界中に伝播しているといつてよく、コロナ禍をせっかく脱したのに、途上国の経済発展やLCC路線の伸長などの追い風を世界は、観光の再生に活か

しきれていないようにも見える。幸い日本では2025年の半ばになっても前年を上回るペースでインバウンドが増加しているが、戦乱は考えにくくても地震、津波、猛暑や水害などで、観光に水を差す事態の可能性も容易に想像がつく。

観光は必ずしも順調に、そして常に楽観的に伸びていくとは限らないということ、コロナ禍だけでなく、中東を発信源とする世界の秩序のアンバランスが示唆しているように思える。

なお余談だが、こうした世界情勢の中でも、日本政府は中東を今後のインバウンド誘致の重要なエリアであるとの認識を示しており、2021年11月にUAEのドバイに日本政府観光局の現地事務所が開設された。2023年以降、中東から日本への訪日観光客は順調に増えており（2023年の約3万3,000人から2024年は約4万5,000人に増加し、2025年には5万人を超えるとみられている）、富裕層誘致に余念がない政府の中東への期待は大きい。

5. 平和の砦としての世界遺産の役割～終わりに～

世界遺産の制度は、水没の危機に見舞われたエジプト・アブシンベル神殿を世界中の智慧を結集して救済した実績から、地球の宝物を国際的な協力のもとで次世代に伝えるという理念を体現するために創始された（佐滝，2009）。実際、世界遺産を訪問したりその登録された背景を知ったりして、国境を越えてお互いに文化や景観を認め合い、それが相互のリスペクトにつながるだけでなく、その延長線上にお互いが相争うことを抑止するという機能が内包されていると言われている。

三大一神教の聖地であるエルサレムも、パレスチナに所属するベツレヘムの聖誕教会も、ほかにもあまたあるこの地域の世界遺産も当然その役割を担っているはずである。しかし、実際には、多彩な文化を象徴する遺産も融和の役割を果たせておらず、むしろ憎悪や分断を煽るようなものになっている面があるのは否定できない。各宗教にとって重要な聖地や世界史を彩る貴重なモニュメントが安全の保証なしに訪問できないという現状は、人類の輝かしい歴史に泥を塗っているような気さえしてくる。

もちろん、これは世界遺産だけのせいではない。2025年秋現在、和平の兆しはあるものの、一向に収束が見通せないイスラエルとパレスチナの戦乱は、一時はイスラエルの武力による一方的なジェノサイドではないかと思えるほど悪化していて、国際紛争の解決に力を発揮すべき国連はほとんど機能していない状況だ。ましてその下部機関のユネスコが管轄する世界遺産がその役割を果たせるわけではないのかもしれない。しかし、それでは、世界遺産は何のために存在するのかという根源的な問いから目を背けることになる。

翻って、日本では、多くの世界遺産登録地で観光客の誘致にしのぎを削っている状況がある。また、「四国へんろ道」「富山・立山の砂防堰堤群」「岩国・錦帯橋」といった、地元で世界遺産登録運動が盛んな「世界遺産予備軍」がまだまだ多く控えているが、その誘致運動のパンフレット等の文面を見ると、観光振興が前面に押し出されており、世界遺産の存在意義であ

る「平和の砦」に言及するような理念はほとんど見られない。地元の観光振興という狭い目的だけで登録運動に邁進するのは、世界遺産の価値や意義を十分理解していないと思われても仕方がない。私たちはあらためて世界遺産は何のために存在するのかという原点を思い起こすべきであり、中東の各国で出会った地元の観光ガイドが誇らしげに語る自国の遺産が真の意味で「世界全体の遺産」になれるよう、私たちも世界情勢を受け止めその解決に向けた方策を深く考え続けることが求められていると言える。中東に隣接するエジプトのアブシンベル神殿救済プロジェクトは、国際的な協力体制による「物理的」な解決法だったが、今求められているのは、エルサレムやシリアのパルミラなど世界史を彩る人類のモニュメントを世界に平和を呼び戻すシンボルにできるかどうかであり、今回紹介した世界遺産が民族や宗教の違いを超えて平和に資するかどうか、私たちも、そして世界も試されているといえよう。

最後に、今回の調査でお世話になった各国の現地ガイドにあらためて謝辞を呈するとともに、それぞれの国に真の平和が訪れることを祈ってやまない。

عليكم السلام (アッサラーム・アライクム=あなた方の上に平和が訪れますように)

【注】

- 1 日本～中東のフライトは2025年夏ダイヤで週に85便ある。
- 2 本文中の写真はすべて筆者の撮影である。
- 3 2021年度の原油の輸入先は、経済産業省の資料によれば第1位が37.3%のサウジアラビア、第2位が36.4%のUAEとなっている。
- 4 ただし、インターネット上に掲載されている日本人による個人の旅行記では、異教徒でも敷地に入れたという記録もいくつかあり、行った時期やその時の警備の状況などで、足を踏み入れることができたようだ。
- 5 後述するイランは注目度の高い論文トップ10%の引用数では、日本を上回っているし、イスラエルはGDPに占める研究開発費の割合が世界トップクラスに位置するなど、中東の研究レベルの高さも日本人があまり知らない事実であろう。
- 6 ドイツでは、バウハウス運動を担った学校などが「ヴァイマル、デッサウ及びベルナウのバウハウスとその関連遺産群」として世界遺産に登録されている。
- 7 アルメニアは世界で初めてキリスト教を国教に定めた国で、早くからエルサレムへの巡礼を行っていた関係でエルサレム旧市街に集住地区がある。
- 8 ただし、イスラエル国民は男性はもちろん女性も兵役の義務があるし、多くの家庭が自宅に核シェルターを備えている。

【参考文献】

- 高尾賢一郎「サウジアラビアの観光政策における課題と展望」(中東分析レポート, 2020)
- 市川裕監修、PEN編集部編「ユダヤとは何か。聖地エルサレムへ」(CCCメディアハウス, 2012)
- 井筒俊彦訳「コーラン(中)」(岩波文庫, 2015)
- JICA「イラン国 タブリーズ及びその周辺地域における観光開発戦略策定に係る情報収集・確認調査
ファイナルレポート」(2019)
- 佐滝剛弘「世界遺産の真実—過剰な期待、大いなる誤解」(祥伝社新書, 2009)

Countries Turning Toward Tourism,
Countries Turning Away from Tourism:
A Look at the Modern World Through World Heritage Sites
in the Middle East

Yoshihiro Sataki

Abstract

Based on his recent visits to World Heritage sites in the Middle East, a country that is both an energy supplier and a party to global conflicts, he considers whether rich cultural heritage with a long history can be linked to global peace. Based on his visits to World Heritage sites in Saudi Arabia, Iran, Israel, Palestine, and other countries, and his experience gaining a glimpse into the local political, economic, and social situations, he considers what impact “tourism” will have on this region, which has been called a powder keg, and on the world.

Keywords: World Heritage, Middle East, Israel, Palestine, Islam